

# という気持ち大切に

フェミニストカウンセラー  
海渡 捷子 (談)

「誰からも好かれる女の子になってね」…それが不可能なことだと気づかず、もがいていた頃の私。働きたいという思いを心の底に持ちながら、悶々としていた私。女性ならではの育ち方、女性のおかれている社会状況をすっぱり包み込んで、女性の視点に立ったカウンセリングをするフェミニストカウンセラーに、この思いをぶつけてみました。

## 他人の目が気になる女性は

他人からどう思われているか気になる女性は多いですね。こんなふうには言ったら誤解されるんじゃないかと、こんなことしたら悪く思われるんじゃないかと。そういう人は、「Aさんと自分との関係」というよりは、「Aさんは自分をどう見ているのか」というだけの関係をつくっているんですね。見られることばかりを気にして、Aさんという人を見ていないから「Aさんでどういう人？」と聞かれても全然わからない。そういう人には、まず自分と人を切り離して「この人はどういう人かな」と考える練習をすることをすすめます。

人がどう見ているか気になるということは、人の期待に合わせて演じてしまうということですね。女として、母として、こうあるべきだというふうに生きていて、自分自身の考え方が育っていないんです。女として、母としてのジェンダーに、縛られているというふうに気づいて欲しいですね。本当は窮屈なはずですから。何かヘンだなということに気づいて、次に自分の感覚が間違っていないということ、新

いとか。聞き流されたら「聞いて」と言わなければダメ。機嫌が悪くなっても伝えなければならぬこともあります。喧嘩になることを避けたい方がいい。言い争いになっても、それで終わりではなく、修正できるので。そこから深い関係が始まります。友達の場合も同じだと思う。

怒ることは女らしくないと思っている人がいますが、自分の怒りを伝えられないから表面的な関係しか持てないのです。一番いいのは、怒りを小出しにしていくこと。ため込むと爆発するか病気になるかどうかです。「それはちよつと違うと思うな」とか「それはちよつと納得できない」とか「そんなふうになると私は怒るわ」とか少しづつ伝えていくといいですね。

## 自分さえ我慢すればはダメ

仕事や地域活動など、何かやりたいことができたとき、家族の理解や協力が必要ですね。そういうときも粘り強く自分の気持ちを伝えていくことが大事です。今すぐにはできないときでもあきらめないで、例えば目標を二年先に持つていくことも考えられますね。自分さえ我慢すればいいと考えるのは良くない。例えば、家庭の中で母は太陽などと言いますが、そのお母さんが幸せでなかったら、他の家族が幸せにはなりません。自分が幸せでなかったら、人を幸せにすることができないという意味で、もつと自分の気持ちを大切にしたいって欲しいのです。その上で何を優先させるかその都度考えて、自

## 怒りは小玉コロコロ

夫と肝心な話をしていない夫婦が多いですね。夫はどう思っているのと聞いてもわからない人が多く。聞き流されたとか、機嫌が悪くなるから言えな

「自分は何をしたのか」をとらえていくと、自分がわかってきます。自分は良いところも悪いところもあるけれど、これが今の私だということがわかって、それを相手との関わりの中でだしていきけるようになる、自分に自信がでてきます。

\*ジェンダー：社会的・文化的に作りあげられた性差

## 女の目から

海渡 捷子 (かいとかつこ)

1980年 日本で最初のフェミニストカウンセリングのカウンセリングルーム「フェミニストセラピー“なかま”」に参加。個人カウンセリングの他、現在、各市各町の女性センター・公民館で「カウンセリング講座」「自己発見・自己表現トレーニング」等、フェミニズムを基本においた女性の生き方全般についての講座・講演等、幅広く活動中

- ・フェミニストセラピー“なかま”スタッフ
- ・心理カウンセラー
- ・東京都足立区女性総合センター「女性相談」相談室相談員
- ・東京都三鷹市「女性のための心の相談」相談室相談員

分で決めて、選択して、行動する。それは、自分勝手とは違います。

人にしてあげることは確かに幸せを感じていると、相手がなくなるとき自分の幸せが作れない。例えばそういう人は、足が悪くなって人に尽くせなくなったとき、人にしてあげることだけが生きがいだったわけだから、人からしてもらうことを受け入れられなくて生き甲斐を失う。そういう意味で、人と関わって、助けたり助けられたりという経験が大

切です。

### 女性も収入を得たほうが：

一度家庭に入ってしまったら、どのように社会参加していけばよいか、モデルがないからわからないと言われますが、上を見るのではなく横を見ると、モデルは見つかるのではないのでしょうか。私の知っている人に、PTA活動から始めて、のちに地域から議員を出す活動に関わった人がいます。生協活動から無添加食品の活動に携わるようになった人もいます。子どもを自然の中で遊ばせたいという思いから、小さな保育園を作った人もいます。職業訓練校で技能を身につけて、掃除の仕事を始めた人もいますよ。この人は義母との関係が良くなかったのですが、義母に電話番号を頼んで時給を出すようにしたことから二人の関係もよくなりました。

ケースバイケースですが、私は女性も収入を得た方が良いと思います。男性が女性の家事労働に支えられて働いているという今の社会事情の中では難しい問題もありますが、自分が仕事をしたことに対して少しでもいいからお金をもらうことが、自信につながりますね。お金がすべてではありませんが、何かで自分のしたことが評価されるというのは、励みになります。

それと、扶養者控除の限度額を超えて収入を得ようとするのは、どうしてだろうと思うことがあります。能力を伸ばしていけるのに、どうして枠にこだわるのかと思います。制度上の問題もありますけどね。

女性のエンパワーメントとよく言われますが、女性が内在する力をつけてそれを発揮していくことでしようか。自分自身を見つめる力、社会に目を向ける力、人と関わっていく力をつけて、それを発揮し、人と分かち合っていく。ネットワークするということでしょうか。女性同士がもっと連帯して、社会の中で力を発揮し可能性を広げていくことが、エンパワーメントだと思います。



# 男性学を始めませんか

大阪大学教授  
伊藤 公雄 (談)

女性学…なら聞いたことはあるけれど、男性学っていったいナニ？  
ところが、これこそ'90年代のキーワード！  
女と男のパートナーシップにひとつの提案を打ち出す「男性学」日本でも  
初めて男性学の講座を開いた伊藤公雄さんに、男性たちの豊かで快適な  
未来について語っていただきました。

## 人間として生きやすい社会をめざして

僕は70年代に女性運動に関心を持っていたのですが、男でありながら女性の立場から男性社会を批判するよりも、男性自身がより人間として生きやすい社会を作ることが、女性にとってもより生きやすい社会になるはずだ、と考えるようになったのです。こういう研究のスタイルは、70年代から'80年代にかけてアメリカでおこってきました。

日本でも、ここ2、3年、自治体などで男性学講座とか男性セミナーとか、ずいぶん増えてきています。サラリーマンの方などに結構人気があります。男性たちも、働きすぎ、企業社会のなかで、このままではオレの人生危ないぞ、なんてことを実感していらつしやるんじゃないでしょうか。

40代から50代の男性は特に、先が見え始めてきたこともあってか、自分の人生や、定年後の妻との関係を考え直すという動機で参加しています。すごいのは、過労死しかけたという人が幾人かいらして、病院のベッドで、このままじゃいかんと思ったり、

リハビリしながら講座に参加しているのです。そういうことでもないかぎり、今までの自分を見直すチャンスを得ることができないのかもしれないですね。

## 男たちよ、鎧を脱ぎ捨てよ

男性の側の問題とは、つまり女性が女らしさのよくなるものに縛られていたように、男性も男らしさのよくなるもの、男らしさの鎧よろいでがんじがらめになっているのではないかとことです。男とは、「妻子を養うものである」とか、「力強くなければならない」とか、「メンツを守らなければならない」とかといった意識が、男性と女性の関係のなかで矛盾を生む。また、男性自身も、結構窮屈な思いをしているのではないのでしょうか。そのくせ生活面では女性に頼りきっていて、自立できていないわけです。

僕は、もともと性別役割分業には批判的でした。家事や育児を自分で責任を持って、パートナーと半々に行っていくうちに、自分の男らしさの鎧よろいに気がついた。だんだん脱いでいって…全部脱ぎざされたとはまだ思いませんが、ずいぶん楽になりました。

例えば、今大学の先生をしているわけですが、メンツを考えると偉そうにしゃべらなければなりません。しかし、社会的にどう見られるかよりも、自分はどういう人間なんだ、というところから対人関係やいろいろなことを始めたら、非常に快適になりました。

どうして、男性が肩書きや理屈やメンツなどの重い鎧よろいを着るのかといえば、それは自分の中身がからっぽだと自分で感じていないからではないか。その意味でも、自分の中身を成長させて、自立していく生き方をしたほうが楽だし、楽しいし、快適なんですからね。

## きっかけは人それぞれ

どうしてこうなったか。産業社会の、男が外へ出て働き、女が家を守るという性別役割分業の仕組みの中で、男性がだんだん自分の感情を押し殺して、家庭の顔も地域社会の顔もなくして、仕事人間にならざるを得なかったからでしょうね。豊かな人生を奪われている、しかもそのことを鎧よろいで包み隠して無

男の目から





理して暮らしているわけです。男性たちには、そこに気がついてもらわないといけないと思います。気がつきかけは、人それぞれで一般論は難しい。妻が病気になるとか、交通事故に遇うとか、そういったことがきっかけになる場合もあります。身近な男性に気がついてもらえるようにするには、さりげ

ない話題でアピールするとか、こうした問題についてのテレビ番組を見てもらうとか、から始めるといんじゃないかな。あんまり過激に迫ると逆効果です。鏡はもろさの裏返しなので、かえってかたくなになってしまいますね。面白いもので、非常にムキになって、意地になって抵抗してしまうようです。

### 伊藤 公雄 (いとうきみお)

1951年埼玉県生まれ。京都大学文学部卒業、同大学院文学研究科博士課程修了。イタリア政府給費留学生としてミラノ大学政治学部留学後、京都大学文学部助手、神戸市外国語大学外国語学部助教授などを経て、1988年より大阪大学人間科学部助教授、'96年より教授。1992年、京都大学で男性学のゼミを開講、'94年からは大阪大学でも女性学・男性学の講義を始める。関西在住の男たちとともに、1991年、メンズリブ研究会を発足（世話人）、'95年のメンズセンター設立にも参加（現在運営委員）。専攻は、文化社会学、コミュニケーション論。

著書に『くもらしさ』のゆくえ——男性文化の社会学（新曜社）、『男性学入門』（作品社）他が、訳書に、ダラ・コスタ『家事労働に賃金を——フェミニズムの新たな展望』（伊田久美子と共訳、インパクト出版会）他がある。

主な社会活動として、大阪府、大阪市、滋賀県などの自治体の女性問題懇話会委員、大阪府女性総合センター（ドーンセンター）運営推進委員会副座長、国立婦人教育会館「社会教育における女性学教育の内容と方法に関する調査研究プロジェクト会議」委員、文部省「青年男女の共同参画セミナー」に関する男女共同参画学習研究委員会委員などがある。

男性自身にもチクリとくる部分なのかな。

### 男性自立のリトマス試験紙?!

男性の生活自立のリトマス試験紙というのを提案しています。「外で洗濯物が干せませんか」というのがそれです。洗濯物を干しているところを人に見られると、自分は妻の尻に敷かれていると思われちゃうんじゃないかと思ってしまうんですね。また、女性の意識のなかにも「お父さん、そんなことすると私が近所で笑われます」なんてこだわりが残っていたりします。家事はやる、料理も作る、でも、洗濯物は干せない。男性心理のこわばったところなんですね。

女性問題は男性問題だ、といわれています。男性側の意識や生活態度を変えないと、女性が抱えている問題は解決しきれませんよね。男性問題もまた女性問題が解決のキーなんです。

男性が企業社会のなかで今まで縛られていた仕事やメンツから解放させるためには、女性にもやっぱり精神的、経済的に自立してもらいたいですね。社会進出してもらって、今まで男性たちが背負いこんできたものを分担してもらえば、男性たちもゆとりができ、「考える」ことができるでしょう。

社会進出は職業参加だけではなくて、ボランティアやNGO（非政府組織）活動なども含みます。もちろんこういった非営利的活動だって女性だけでなく男性にも開かれていくことが必要でしょうね。また、こうした活動が経済的にも保障されなくてはいいと考えているのですが。

20パーセント変われば、それを80パーセントにするのはそう難しいことではないと思います。まだまだ鏡を脱いでいる男性は少数ですが、女性と男性がいいコミュニケーションを築ける時代はそんなに遠くないのではないかと思いますよ。

# 同じ目の高さで介護

さやの家 デイサービスセンター介護福祉士 稲葉 貴敏さん

## 女性の仕事とされていた 介護の世界へ

総合的な社会福祉を目指している社会福祉法人天竜厚生会は、今年4月、掛川市長谷に特別養護老人ホーム「さやの家」を開設しました。在宅痴呆、重度の高齢者を職員が送迎してお世話する、デイサービスセンターも併設されています。そこに介護福祉専門学校を卒業したばかりの稲葉貴敏さんが数少ない男性のケアワーカーとして勤務しています。稲葉さんが、高校二年生のとき、現在99歳になるひいおばあさんが倒れました。お父さんと二人で台



“さやの家”納涼週間で活躍の稲葉さん

所から部屋まで運びましたが、男手でも大変なことでした。それから祖母の介護をして、それまで介護について何にも知らなかったことを実感しました。

介護は、決して女性だけの仕事ではないということ。家族の取り組みのなかで痛感したのです。小さい頃から、男・女にこだわらない教育を受けてきたことが、この進路決定に結びついたのかもしれない。両親も賛成し、応援してくれました。

稲葉さんのデイサービスセンターでの一日は、お年寄りを自宅に迎えに行くことから始まります。食事、トイレ、着替えの介助や入浴サービスや家族への精神的なサポートなどもします。幅広い仕事をこなしお年寄りを自宅まで送ります。

「毎日が本当に忙しく過ぎていきます。女性的な仕事とか、男性的な仕事と回りで考えるような区別は感じません」

帰って行くお年寄りの表情が初めよりも明るくなり、「また来るよ」と、言ってもらえると、本当に嬉しくなることでした。しかし、戦中、戦後の食べる物もない苦しい時代を生きてきたお年寄り、物が豊かにある時代を育った自分とは、世代間のギャップがあり、何気なく言ったことが、お年寄りにショックを与えてしまうこともあります。これから、それをどう乗り越えていくかが、課題であるとのことでした。

## 取り組みの姿勢は 同じ目の高さで

「介護させていただく」という姿勢を忘れず、過剰介護にならないように、お年寄りがもっている能力を大切に介護を心掛け、常にお年寄りと同じ目



“さやの家”にて

## 地域に開かれた 施設を目指して

「さやの家」では今後、小学生や中学生一般の人々と、福祉を考え、高齢社会への対応を学ぶ場にしていただきたいと考えています。「少子・高齢社会が目の前に迫っています。誰でも最低限の介護の知識を、持って欲しいですね。またその知識をここから学んでいってくれたらと思います」

「専門性を身につけた、あらゆることに通用する介護者になりたい」と、インタビューをしめくつた稲葉さん。

今、確実に女と男の垣根を低くする考えを持った若い世代が育っています。